キャラクター名
秋月 柊太

プレイヤー名

シンドローム	キュマイラ ブラム＝ストーカー	ワークス	UGNチルドレンA	カヴァー	高校生
オプショナル		年齢	17歳	性別	男
覚醒	憤怒	衝動	憎悪	初期侵食率	35 %
出自	姉妹	経験	償い	邂逅	腐れ縁

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	4	1	0			5
感覚	2	0	0			2
精神	1	0	0			1
社会	1	0	0			1

HP	31
行動値	5
(非装備時)	5
戦闘移動	10
全力移動	20

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	2		射撃			ＲＣ	1		交渉		
回避	1		知覚			意志			調達		
運転：			芸術：			知識：			情報：UGN	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
(コンボ1)	白兵	10r+2	0	-5		C値8、装甲無視、ダイス+[Lv+2]、HP回復+[Lv*4]。
+素手		0				
+完全獣化		0				
+渇きの主		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品

ロイス

対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
野獣本能-ビーストハート-	P	N		
アウェイク	P 同情	N 脅威		
秋月 果穂	P 純愛	N 偏愛		
物部 語	P 信頼	N 復讐		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 2	残り財産P：

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：コスト分のHPで復活								
完全獣化	3	6	ﾏｲﾅｰ	至近	自身	-	-	
効果：シーン間、【肉体】を使用したあらゆる判定ダイスを+[Lv+2]個する。※素手以外は装備・使用不可								
渇きの主	2	4	ﾒｼﾞｬｰ	至近	単体	<白兵>	-	
効果：装甲値無視。命中時あなたのHPを[Lv*4]点回復する。								
CR:ﾌﾞﾗﾑ=ｽﾄｰｶｰ	2	2	ﾒｼﾞｬｰ	-	-	ｼﾝﾄﾞﾛｰﾑ	-	
効果：組み合わせた判定のC値を[-Lv](下限値7)。								
獣の魂	1	5	ｵｰﾄ	至近	自身	-	100↑	
効果：【肉体】を使用した技能の判定を行う直前に使用し、その判定ダイスを+5個する。1シーンに[Lv]回。								
復讐の刃	2	6	ｵｰﾄ	至近	単体	<白兵>	-	
効果：対象からあなたに攻撃が行われた際、ﾘｱｸｼｮﾝの直前に使用する。ﾘｱｸｼｮﾝを放棄することで、対象に白兵攻撃を行い、組み合わせた判定のC値を-[Lv](下限値7)する。 ※他のエフェクトと組み合わせて使用できない。								
赤河の支配者	3	2	ｵｰﾄ	至近	自身	-	-	
効果：HPダメージが算出された直後に使用し、受けるダメージを-[1D+Lv*2]点する。								
クイックダッシュ	2	4	ｾｯﾄｱｯﾌﾟ	至近	自身	-	-	
効果：即座に戦闘移動を行うことができる。1シナリオ[Lv]回まで。								
	★							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

【基本】
秋月 柊太(あきずき しゅうた)、17歳。

【PCの過去】
それは雲が静かに流れる晴れた日だった。
気だるげにいつもと変わらない学校生活を送っていた。部活が終わり家へと帰った。
家に近づくにつれ、妙な胸騒ぎする。いつもであれば、室内の光が薄っすらと見え、人の気配を感じることができる。
しかし、今日だけは違った。街灯の明かりだけが際立ち人の気配を全くと言っていいほどに感じなかった。玄関は鍵を使わずとも開いた。途端、今までに嗅いだことのない匂いが鼻を刺す。明らかにいつもとは様子が違うが、いつもの日常が広がっていることを願いながら家の中へと入っていった。
玄関を上がり、恐る恐るリビングまで歩みを進める。リビングへと続く戸を開くと、そこにはもう日常はなかった。そこに広がっていたのは、真っ赤な惨状だった。リビングの窓が割られリビングの真ん中に異形のモノ、その傍らに腹を引き裂かれた両親が倒れ伏し、リビングの隅でおびえる妹がいた。
異形のモノとの間に入り、妹を庇おうと動こうと思ったが身体に力が入らなかった。そして、異形のモノが妹の方を向き、右腕を掲げた。瞬間、妹の頭が木っ端微塵となり、リビングの壁が血で染まった。
何もできなかったという無力感と日常を奪われたという怒りが体を心を震わせた。「体が熱い……熱い……あつ……い…。」体がみしみしと音を立て、徐々に目の前の異形のモノと同じような姿になっていく。「ころす……ころす……こ……ろす……。」自分で自分を抑えきれないようになるのが分かった。このまま、力に身も心も任せてしまおうと思ったとき、異形のモノがこちらを向き右手を掲げた。「(こんなところで、終わるのか…僕の人生はここで終わりなのか…)」と死を覚悟したとき、リビング全体が凍り付いた。目の前の異形のモノは全身氷漬けになり、僕は腰から下が氷漬けになった。リビングの窓から人が入ってくる。その人は、躊躇なく異形のモノを粉々にした。状況が理解できなかったが、その人は言った。「一緒に来るかい？君の日常を奪ったモノたちへの復讐のために。」僕はその人の手を取った。彼は物部 語と言い、彼からは様々なことを教わった。"UGN"は敵であり、僕の家族を殺した異形のモノを生み出したのもその組織だということを。それからは、僕の日常を奪ったモノたちへの復讐のために自らの力を振るった。彼に利用されているとも知らずに…。物部さんの追っ手を殺したりUGNの支部を半壊に追い込んだりとやれることは全てやった。だが、家族も日常も返ってはこない。知っていた。知っていたが僕にはもうこれしかなかった…。